
ラガヴァーリン

高千穂ゆずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラガヴァリン

【Nコード】

N3060B

【作者名】

高千穂ゆずる

【あらすじ】

たったひとつの恋に破れた青年が出会った男。明け透けな物言い
で、人を従わせてしまう独特の雰囲気を持った男だった。

（前書き）

ボーイズラブです。苦手な方はご遠慮ください。

店内に渦巻く喧騒も、どこか別の世界から聞こえてくる小さな物音にしか感じない。天然木のカウンターに肘をつき、茫洋と手元のグラスを眺めていた。

「よけいな世話なんだろうけどさー。アンタ、死にそうなのツラしてるぞ」

突然声をかけられ、視線だけを動かす。バーテンにチケットを渡しながらこちらをみつめる男は、上機嫌な笑顔を浮かべ、さらに続けた。

「アンタが飲んでるその酒。ラガヴーリンというスコッチだろ？ せっかくだろいい酒なんだから、もう少し美味そうな顔で飲めばいいんじゃないねえの」

初対面のはずの男に飲んでる酒の銘柄まで言い当てられ、青年は驚いた。そこで、死にそうだと表現された表情に生気が戻る。

「美味そうについて言われても……」

青年は言葉を詰まらせた。今、彼が飲んでるスコッチは思い出の酒なのだ。しかもあまり楽しい思い出とは言えない。瞼を伏せると、男がずいっと身体を寄せてきた。

「まさか訳あり！？」

そのまさかなのだが、しかしこの男はいったい何なんだろうか。先ほどから馴れ馴れしく話しかけてくるが、ナンパの類なのか。だが、そうは思えなかった。身綺麗なスーツは清潔感で溢れているし、明け透けない物言いは彼の人柄からくるもののような気がする。そこに邪な感情は感じられない。

だからなのか。青年の口が急に滑りだす。

「たったひとつの恋を失ったんだ」

そう。一生を賭けてもいいと思った恋だった。だがその恋は破れ、青年は一人でその思い出に浸ることもできずに自棄になっていた。

グラスの半分ほどになっていたスコッチをぐいと煽る。

「ラガブーリン。もう一杯ください」

乱暴にチケットをカウンターの上へ投げる。バーテンダーは手馴れた様子でそれを拾い上げ、空になったグラスを下げた。

隣の男は青年の次の言葉を待っているようだ。自分が頼んだ酒を脇へ退かせると、腰を落ち着かせた。

「だから生きていても意味がない。だから美味しい酒を飲んでも美味しいと感じない」

苛立った様子で前髪を引っ掴み、唇を歪ませる。そこへタイミン
グ良くグラスが差し出され、青年は一口含んだ。

衣擦れの音がして横を見ると、男がカウンターに肩肘を寄せこちらを見ていた。

「それだけいい恋したんなら、生きてきた意味はあるんだから、そういう言い方はやめたほうが賢明だな」

「知った風な口を利く」

嫌味たつぷりに言い放ったのに、男は意に介さず話し続ける。

「その、たったひとつの恋に出会ったのが偶然なら、アンタがこの世に生まれてきたのも偶然なわけだ。だってその恋に出会うためだからな。じゃあ、アンタを産むためにアンタの両親は出会ったわけで、それも貴重な偶然なわけだ。だけどここまで運のいい偶然が続くっていうのは、ただの偶然じゃねえよなあ。こういうのを必然て言うんじゃねえの？ それを全部、意味がないだの言ってチャラにすんのは、それこそ無意味ってもんだろうよ。——なあ、そうは思わねえ？」

青年は目を瞠った。

これまで一度も出会ったことのないタイプの男だったからだ。

「でも……終わっただけど？」

声を震わせ、喉を詰まらせながら問う。

「たったひとつって思うのも悪くねえけどさー。ぜったい次があるって！」

「……ないよ。数少ない出会いの中でみつけた大切な恋だったんだから」

「だーからー。その恋を否定はしねえって。ただもう少し周りを見たらどうかって言っただけだ」

それはどういう意味なんだろうか。やはりこの男はナンパ目的で口説いているんだろうか。

青年は思いきって確かめてみた。

「もしかして……ナンパ？」

「え！ 俺が？ 誰を！」

「だから、僕を」

「なんで俺がアンタをナンパする必要があるんだよ」

「違うの？」

「あつたりまえだろうが！ 俺には大切な恋人がいるからな。浮気なんかするもんか。……恐ろしい」

きっぱり否定した男はぶるつと身震いして見せた。嫉妬深い恋人なのかもしれない。

青年は思わず吹き出した。今頃アルコールが回ってきたのかわからないが、楽しくてしょうがない。堪えきれずに大口を開けてバカ笑いすると、安堵した顔で男が手を伸ばしてきた。

その手はポンと軽く頭に乗せられ、小さな子供にするように撫で回された。

「幸せ……なんだ。貴方の方は」

「ああ。めちゃくちゃ幸せだぞ。俺がこの世に生まれたのは、アイツと一生涯肩を並べて生きていくためなんだと思っている。アイツもそれは同じだ。ケンカもして勘違いもして、会えずにいた時間もあつたけど。でもそれは全部、今の俺たちのためにあると思っている。だから……アンタもそんな辛気臭いツラで酒なんか飲まずにさ。パアツとやればいいんじゃない？」

初対面のくせに馴れ馴れしく話しかけてきて、拳句説教まで垂れた男は屈託のない顔で笑っている。それは幸せな人間だけが放つこ

とができる煌きだ。

だがどういうわけだか不愉快にはならない。この男の持つ独特の雰囲気のせいだろう。

「一人じゃ、パアツとできないよ」

「よし！ そんなら俺らに混ざれ」

男はそこでようやく自分が頼んだ酒のグラスを手にした。中の氷はかなり溶けていて、ロックのはずが水割りのようになっていた。目で自分のグラスを持てと合図するものだから、青年はおとなしくそれに従った。

この男には人を従わせる器量もあるのだろう。なんとなくそう感じた。

「でもいいの？ 僕、初対面なんだけど」

「構わねえよ。友達になっただけで言えばそれでオーケーだ」

「そうなの？」

「そうなんだよ」

おーいと大声で叫び、仲間をこちらへ向かせる。青年は一瞬緊張したが、すぐに振り返った男の邪気のない笑顔を見せつけられ、つけられたように笑った。

「こんにちは。たった今ナンパされた男子大学生です！」

どうやらその仲間内に男の恋人がいたらしく、その直後、軽く血の雨が降った。

「きみ、名前は？ 俺はねー、中嶋」

声を掛けられて振り仰ぐ。

「僕は近藤って言うんですよ」

たったひとつの恋と違っていても。

破れた恋に胸を痛めても。

生きていれば。

「出会ってほんと、縁だよねー」

「そうですね」

「あ、これ俺の名刺ね。裏にケーバン書いておこう！ 掛けてね？」
最後に飲み干した思い出のスコッチは、背伸びした恋と同じ消毒
薬の匂いがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3060b/>

ラガヴァリン

2010年10月8日15時14分発行